



石岡繁雄

屏風岩山石登攀記

屏風岩完登の壮挙は日本山岳界の大きい事件であり、
言うまでもなく石岡さんの不屈な闘志によって成就されたものであるが、

井上靖氏評

氏によって為されたということが
大きい意義を持つものではないかと思う。

氏は記録を造る人でなく、山に志を刻む人であるからである。

あるむ刊 定価(本体2,300円+税)

序

穂高の中心澗沢の表玄関にそそり立って、山麓を歩きかうアルピニストたちを睥睨する屏風の大岩壁は、戦前の登山界において、登攀不可能の象徴でもあった。

しかるに昭和二十二年夏、本書の著者石岡君は、二人の少年を連れてこの屏風岩を完登したのである。そのときの記録は『屏風岩登攀記』（昭和二十四年発行）として公表した。

あの井上靖氏の小説『氷壁』のモデルとなったナイロンザイル事件をご存知だろうか。遭難者はこの石岡君の実弟である。私はくわしいことはしらないが、この事件と取りくんだ彼のヒューマニズムを高く評価している。

いづれにせよ、彼が若き日に挑んだ屏風岩の登攀は、わが国における屈指のアドヴェンチャーであり、本書の出版は、この異色ある山岳ドキュメントを再評価するうえで、まさに時宜にかなったものといえよう。

昭和四十九年四月

今西 錦司

刊行によせて

石岡さんは名アルピニストであると共に、志を持った数少ない登山家の一人である。私は氏の実弟の遭難事件をモデルにして『氷壁』という小説を書いているが、私に『氷壁』の筆を執らしめたものは、事件そのものよりも、寧ろその悲劇を大きく登山界にプラスするものであらしめようとする氏の志に他ならなかったと思う。

屏風岩完登の壮拳は日本山岳界の大きい事件であり、言うまでもなく氏の不屈な闘志によって成就されたものであるが、氏によって為されたということが大きい意義を持つものではないかと思う。氏は記録を造る人でなく、山に志を刻む人であるからである。

井 上 靖

自序

拙著『屏風岩登攀記』は、昭和二十四年に発行されて以来、四十九年それに今回と版を重ねてきました。ふり返ってみますと私はその度に、醜いものを吐き出し、結局、気がついたときには、五臓六腑をことごとくさらけ出していました。

私の最初の登山は、中学四年のときの白馬岳でした。そこで私は山の美しさと雄大さに打たれました。高等学校では岩登りを教わり、山の厳しさとそれに接するときの生命の高ぶりを知りました。それ以来私は、山の魅力のとりことなり、獮のようにその夢を食べつづけてきたように思います。

山は、その美しさと厳しさが織りなす綾錦を形成し、無数の美德と教訓を提供してくれているはずであり、従って私は、それに深く影響されるはずでありました。またむろんそれが私の山への期待でもありました。

しかしながら私の歩いた道には、そういうものよりはむしろ、暗くて悲しい人間の葛藤や、ナイロンザイル事件のように、社会との闘いといった全く異質のものが、大きな位置を占めております。

そして本書は、版を重ねる度に、当初の意志に反して、そういうものが影を濃くしてしまったのであります。

いま私は、山生活四十年をふり返って、山と私との妖しいえにしを反芻しながら、自分にとって山

とはいったい何であつたか、という思いにかられております。

読者諸氏が、私の山生活の総決算ともいふべき本書から、私の体験を超えて、山のすばらしさと山のなんたるかを、いささかでも読みとつて下さるならば、望外の幸せであります。

昭和五十二年九月

著者記す

屏風岩登攀記

目次

序	今西錦司	i
刊行によせて	井上靖	ii
自序	石岡繁雄	iii
I		
思い出の旅		1
思い出の旅		3
初めての穂高		5
惨敗		24
高所露営		46
戦時中の登山		61
戦争と釜トンネル		72

II 屏風岩登攀記……………83

屏風岩への挑戦……………85

ゆらぐ不可能性 85

第一次・第二次攻撃 89

秘められた岩壁 94

「可能性あるルート」の発見 104

第三次攻撃——ルートを求めて 108

第四次攻撃——ふたたび絶望へ 120

勝つための条件……………132

不可能性との闘い 132

意外な伏兵 134

慣習律を無視して 139

両刃のやいば 141

	分業作戦	147
	母校に背を向けて	149
	地形とルートの関係	154
	第五次攻撃——完登
	その後の屏風岩
	国体への波紋	243
	中央カンテ第二登	251
	中央カンテ積雪期初登攀	254
	Cフェース第二登とB10ブッシュでの転落死	255
	屏風岩回想の登攀	260
	問題の行方	262
付記1	地形および登攀小史
付記2	岩登りの慣習律について
272		
266		
243		
157		

III 戦後の登山……………275

戦後登山の思い出話……………277

ある岩稜会員の話……………344

雲海上の日食……………387

墓 参——ナイロンザイル事件の一断面……………408

昭和四十九年版へのあとがき……………427

改訂にさいし……………431

復刊に寄せて……………本田善郎 432

あとがき……………石岡あづみ 434

表紙 二〇〇四年六月、横尾本谷沿いの涸沢登山道から望む 澤田栄介氏撮影
口絵 一九六九年十月、四のガリーから眺めた屏風岩 永井 充氏撮影

I
思い出の山旅

思い出の山旅

矢も楯もたまらなくなつて山へ出かける、うつとりと夢うつつに山へ登る。だが私はなぜ山へ登るのであるか？ 人間はいつたい何のために山へ登るのであるか？

これはすべての山男たちにたいしても、また私自身のうちにも、幾千回となく投げかけられた疑問である。その時によつて、あるいは答える人によつて、それぞれの解答は与えられはしたであろう、しかし、けつきよくは答えられない疑問である。それを言葉で表現した時、山男の胸にはなにか割りきれないものが残ることであろう。この矛盾に私は長い間苦しめられてきた。そして今日では、ひきような逃避かもしれないけれども、その解答を見出そうと苦しむことが、馬鹿らしいことであるかのように思われてきた。

登山というのは、しよせん「行」^{イグット}の世界である。その意義をいかに「言」^{ロウズ}の世界に求めてみたてむだである。生きることの意義や、生存の目的をいかに言葉達者にしゃべつてみたて、それで立派な人生が具現するとは限らない。むしろ黙々と強くたくましく生きることにごそ立派な人生があるように、登山もその「行」の集積の上によつての疑問が解決されるのではあるまいか。

登山とは何か？ この問いに最も雄弁に答えるものは登山の歴史である。あるいは、一人の登山家の生涯である。マンメリーの一生、ギドレイの生涯、あるいはマルクルの生涯は、彼らが登山の意義について語った片々たる言葉の何百倍とも知れぬ力強さをもって、私たちに、登山そのものの何たるかを教えてくれる。

ここにおいて私も、小さいながら一人の登山家として、屏風岩に登攀するまでにたどってきた道を書き綴ることによって、この疑問にたいする私なりの解決の仕方を求めたいと思うのである。